慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	お伽草子『まんじゆのまへ』試論
Sub Title	A discussion of the otogizoshi "Manju-no-mae"
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.78, (2000. 6) ,p.24- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

お伽草子『まんじゆのまへ』試論

恋田　知子

お伽草子の一つに、『まんじゆのまへ』と呼ばれる作品がある。中山の観音利生譚に御家騒動物の絡んだ物語で、新旧雑多な要素を含み込み、また寛文十三年と比較的新しい刊行年であることからか、これまであまり顧みられることがなかった。しかし、その内容は、初期古浄瑠璃「五部の本節」の一つ「鎧がへ」と同材であり、おそらく中世にまで遡る古い語り物から発生したものと推察される。島津久基氏は、『まんじゆのまへ』における諸要素を分析され、そこから「純御伽草子から愈々古浄瑠璃風物語への推移を示してゐる作」で、「古浄瑠璃に近いもの」とされた。(1) また、阪口弘之氏は、八幡太郎義家登場の背景として、八幡及び源氏信仰、「満仲」との音通などから、摂津の多田における万寿という女性唱導者による唱導を想定され、それを直接の基盤として『まんじゆのまへ』が成り立ったものと想定された。(2) 本稿は、阪口氏の御論考を踏まえ、この物語の内部構造から、女系の語りの関与の可能性を指摘するとともに、「中山」という地について改めて考え、お伽草子『まんじゆのまへ』の成立事情の一端を明らかにすることを目的としている。

一　諸本について

『まんじゆのまへ』及び、これと全く同材の物語で、現在その存在が確認できる本文としては、管見の限り、以下に挙げる三本のみである。

・寛文十三年（一六七三）江戸鱗形屋刊絵入本『まんじゆのまへ』（外題『まんじゆの姫』[3]）上中下三巻三冊。大型本。
東北大学狩野文庫蔵。『近古小説新纂』、『室町時代物語大成』第十二巻所収。

・万治三年（一六六〇）山本九兵衛刊絵入本『よろひがえ』一冊。半紙本。六段。
東京大学霞亭文庫蔵。『古浄瑠璃正本集』第三巻所収。

・寛文頃（一六六一―七三）写、奈良絵本『よろいかへ』上中下三巻三冊。大型本。
中野幸一氏蔵。『奈良絵本絵巻集』第五巻所収。

刊行年では、古浄瑠璃が最も古く、続いて奈良絵本、お伽草子となるわけだが、内容の成立を考えた場合、お伽草子と古浄瑠璃とでは、それぞれに新旧の要素を孕んでおり、刊行年をもって、その物語の成立順序を言うことは意味を持たない。そこで、大筋に沿いながら、諸本における主な異同部分を確認していく。後冷泉帝の時代、周防判官もりとしは、権中納言の姫君を北の方とし、安芸・周防・長門三国を有する果報者であったとする設定において、奈良絵本では、もりとしの二人の家臣のうちの忠臣ともはるが登場しない。故に、後にもう一人の家臣かね村の裏切りから起こる両者の合戦のモチーフもなく、あっさりと主君なき後の権力を手にする形になっている。また奈良絵本では、はじめに、山神の使いの鹿が巻狩を行うもりとしを諫め、それ以後狩猟を取り止めたという話があって、これが、後に拷問死

した姫を守護するものとして現れる。さらに、中山観音に申し子祈願をする際、奈良絵本においては、その子種が父子の間に死を招くものだとされ、それが現実に起こらなかったため、観音に悪口したことでもりとしが死去するといった、典型的な観音利生譚の形をとっている。[4] 加えて、最も基本的な相違として、観音から授かった娘を、奈良絵本では「せんじゆ」と名付けているのである。「せんじゆ」の名称は千手観音を想起させ、より観音利生譚を意識した形と言えよう。だが、「千手」は「千寿」とも表記でき、万寿と交換可能な名称であったとも想定できる。三国を横領したかね村は、御台と姫を退け、母は鎧と引き替えに越後へ、万寿は苛烈な拷問の末、息絶えてしまう。ここで注目すべきは、奈良絵本における乳母の活躍の簡略化である。お伽草子、古浄瑠璃においては、拷問の果てに捨てられた姫のもとへ救助者として現れ、後の行動を共にしていく存在として、この乳母が描かれているのに対して、奈良絵本では、一晩添い寝するのみとなっている。よって、蘇生後、姫は一人で出家し、諸国を巡るという形になっているのだが、奈良絵本の結末部分では、この乳母に褒美をとらせる形をとっているのである。褒美をもらう割には、奈良絵本において、乳母はそれほどの活躍を見せてはおらず、二人で比丘尼姿となって諸国を行脚するお伽草子と古浄瑠璃の形の方が、二人づれという女性の旅の描かれ方など[5]からいっても、やはり本来的であったように思われる。姫と義家が結ばれた後、かね村に対する報復のため、周防へ使いを送る場面においても、奈良絵本では、合戦の末の敗死が描かれている。この部分に関しては、特にかね村への報復に、お伽草子と古浄瑠璃では、火車によりさらわれるという比較的新しいモチーフを取っている。だが、こうした必罰のモチーフで、合戦描写が用いられることは少なく、また内容的にも詳細で説明的といえ、後の増補の可能性が考えられる。あるいは原態においては、三本のような形を取らない報復であったとも推測される。

お伽草子と古浄瑠璃とは、本文の細部には異同が見られるものの、おおよそ同系統のものと判断される。但し、両者の間に、直接の交渉があったとは考えがたく、おそらく古浄瑠璃の刊行年である万治三年を遡る古い浄瑠璃から、両本が成立したとみるのが妥当であろう。また、奈良絵本は、お伽草子、古浄瑠璃の両本と同材ではあるものの、内容上、かなりの異同が見られる。中野幸一氏は、古浄瑠璃『よろひがえ』と比較され、「この両者は、一方が他方に依ったと見るべきではなく、『鎧がへ』という物語がまずあって、それが一方では古浄瑠璃に仕立てられ、他方では奈良絵本に調製されたと見るべきであろう」と推察されている。[6] 成立年代は比較的に近いものの、三本それぞれが互いに直接関係して成立したものとは考えられない。また、挿絵の面から考察しても、三本それぞれ異なる部分を図像化しており、絵を媒介にした直接関係なども考えられない。奈良絵本については他の二本より新しいものと推察されるが、お伽草子と古浄瑠璃については、異同部分によっても、その新旧は見極めがたい。ただ、より内容が簡潔であるという点では、お伽草子の方が古態をとどめているといった印象を受ける。

正徳元年（一七一一）刊の竹本筑後掾による段物集「鸚鵡か杣」の中で、筑後掾は「此外に、都めぐりといふもの、一段有、是は、検校の門弟、京東の洞院目貫やの長三郎といふ人の作なり、かけまくも賢き、慶長の帝、是を興ぜさせ給ひて、人形にかけさせ、叡覧度々有しより、浄瑠璃太夫、受領に拝し、世に行れて、安口の判官、弓継、鎧がへ、戸井田、五輪くだき、是を五部の本ぶしと傳へ侍る」[7] と述べている。ここに挙げられる「五部の本節」のうち、現在、正本が確認できるものとしては「戸井田」を除く四本で、刊行年のわかるものとしては、寛永十四年（一六三七）六月の『安口の判官』、正保五年（一六四八）三月の『弓継』、そして万治三年の『よろひがえ』の三本である。また『五輪くだき』は、近世初期の絵巻『上瑠璃』の一部であり、[8] 『弓継』『安口の判官』についても、絵巻や奈良絵本を含め、比較

的古い正本が伝存しており、室木弥太郎氏が考察なさったように、「中世の語り物の域を脱していない」ものといえ、「いずれも中世以来の語りもので、それが浄瑠璃節という新しい衣を着た」[9]ものであると考えられる。こうした「五部の本節」の一つである『よろひがえ』について、阪口氏は、特にその道行部分が、万治寛文を下限に更に遡った頃の古い道行を編集集成した大東急記念文庫蔵「道ゆき」所蔵の「よろひがへ北国道行本ふし」[10]と殆ど差異のないことから、「遠い語り物時代を想起させる程の長い本格的な道行」と指摘された。『まんじゆのまへ』は、この『よろひがえ』とほぼ一致しており、また、阪口氏が推定されたように「上中下三巻形式ながら、各巻の中間あたりで改行が施され」ていることなどから、「おそらく語り物が上演向きに徐々に整備され、六段に移行しつつあった時代の浄瑠璃が、草子化されたもの」と考えられる。なお、『言経卿記』の天正十六年（一五八八）八月十八日の条には、「興門御所労見舞ニ罷向了、精進魚類物語御借用之間進了、又瀧口物語鎧代物語源氏供養寸借進了」[11]と記されている。この「鎧代物語」が、はたして、古浄瑠璃『よろひがえ』、あるいは奈良絵本『よろいかへ』と同内容のものであったのか、現在のところ不明ではあるが、少なくとも「鎧代物語」の名を持つテクストは伝存しておらず、「鎧がへ」である可能性は高いといえ、十六世紀末の段階で、すでに写本として存在していたと考えてよいだろう。

二　万寿の文芸

万寿は、中世の文芸世界においては、しばしば、八幡あるいは源氏とともに登場する。例えば、幸若舞曲「烏帽子折」において、義朝が青墓の長者との間に残した忘れ形見として、万寿の姫が登場する。用明天皇と豊後の万の長者の娘玉よの姫との恋を、宇佐八幡が取り持つという物語を語る長者の娘として万寿が登場し、父義朝の菩提供養のために

出家していると伝える。この万寿の姫について、室木弥太郎氏は「義朝の一家一門が、東海地方に残したものを、生き〳〵と語ることのできた人」と想定され、その母の長者についても、「ごぜ（遊女）たちの前で、草刈笛のいわれを丁寧に語っているが、彼女もその方の専門家であった」[12]と推察されている。八幡信仰と関わる語り物を保持する長者の娘であり、父義朝の菩提供養をする万寿には、源氏との関わりをも持つ女性としてとらえられる。同様に、御伽草子『唐糸草子』においても、万寿は八幡の霊験によって母子再会を果たしている。この物語は、唐糸、万寿の二人の女性を中心に、大きく前半と後半の二つの話に分けられ、『唐糸草子』の題名を有しながらも、物語の後半では、娘の万寿に多くの紙幅が割かれており、「母子二代の物語」[13]であったことが指摘される。母子重視という観点からみても、この『唐糸草子』には、明らかに女系の語りをその根底に想定することができよう。そしてまた、宇佐八幡の信仰と深い関わりを持つ百合若伝承[14]においても、万寿姫が登場する。幸若舞曲「百合若大臣」において、百合若の北の方の身代りとなって、「まんなうが池に柴漬け」にされる門脇の翁の娘の名前は明らかではないが、豊後における伝承においては、身代わりの娘を「萬壽姫」とし、その菩提供養に建てられた「萬壽寺」の縁起として成り立っているのである。[15]この地には、万寿姫を百合若とともに語ろうとする動きが見てとれる。さらに、同じ九州地方の万寿の、それも身代わりの伝承として、肥前黒髪山の為朝の大蛇退治話が挙げられる。これは、長崎県武雄市西川登町高瀬の県道添いにある「万寿さん」といわれる観音堂にまつわるもの[16]で、父の死後、家の再興のために、大蛇の人身御供となった万寿とそれを退治する為朝の話で、様々な伝説となっていたらしく、例えば『武雄市史』などでは、盲目の母の供養として人身御供になるという形で伝えられている。[17]地誌類などでは為朝と座頭の大蛇退治とあり、万寿の話としては文献上に見いだせないものの、柳田国男が「此徒が近国を演述してあるいた黒髪山大蛇物語といふものは、立派な読み本になつてその幾通り

かゞ今も伝はつて居る」とし、その一つとして「松尾弾正正之助の忘れがたみ、万寿と小太郎との姉弟が登場して、姉の万寿の前は水の神の牲となつて沈められたといふ」[18]とあり、この伝承の一系統にあったことを窺わせる。ここにも、為朝と万寿という「源氏昌栄譚」の中の万寿が確認される。また、筑前盲僧と万寿、すなわち盲僧集団の語りと万寿とに何らかの接点があった可能性をも指摘できるだろう。

以上のことから、阪口氏は、万寿を「源氏の統領達と八幡信仰に深く関わって登場してきた女性の名前」で『まんじゆのまへ』における「中山寺利生譚と源氏昌栄譚を結」ぶ存在であったとされ、「万寿に女性唱導者の影を見るならば、それは源氏信仰、したがって八幡信仰に深く関わりをもった人ではなかったか」と推察された。すなわち、『まんじゆのまへ』における義家登場の背景に、「八幡・源氏信仰の女性唱導者万寿」を想定され、その際「万寿」と「満仲（満重）」の音通、及び源氏信仰の盛んな地であったことなどから、「摂津国多田の中山寺」での唱導を反映したものと推測された。

だが、そもそも「～寿」という名称自体、中世には多く見られるものであり、とりわけ女性の芸能者に多く見られる名前であった。『長秋記』には、遊女の長者の名称として「金壽」が見られ、『梁塵秘抄口伝集』の「延寿」、『吾妻鏡』の大磯の遊君「愛寿」などが挙げられる。『春日臨時祭芸能記録』の貞和五年（一三六六）二月十日の記事にも、能に堪能な巫女たちとして「鶴寿御前」「宝寿御前」の名が見え、また『看聞日記』にも、盲御前として「愛壽」「菊壽」の名が確認できる。こうした記録、日記の類によって、「～寿」の名称が芸能者の名として定着していたものであったことが指摘でき、それは、『さんせう太夫』の「安寿」や『平治物語』の青墓長者の娘「延寿」など、文芸世界にも反映されていったものと考えられる。『古今著聞集』の白拍子「玉寿」、『藤の衣物語絵巻』の遊女「かうしゆ」「きくしゆ」[19]、

『源海上人伝記』における遊君「月寿」「花寿」など、物語世界でも、「～寿」が白拍子あるいは遊女といった女性芸能者たちの名称として定着していたことが確認できよう。また、『大塔物語』で戦死者を供養する遊女「花寿」や、『桂清水物語』で法華経読誦する「頼寿」、『長柄の草子』の菩提供養する「玉寿」など、「亡霊供養の呪法と物語とを持ちあるいた女性の名」[20]ともとらえることができる。「～寿」には長寿のイメージを見いだせるとともに[21]、祝意を感じさせるものであることからも、芸能者にふさわしい名称であったろうと推測される。以上のように、「～寿」の名前が、芸能に携わる者、とりわけ女性の諸芸能者に多く見られるものであることが確認できる。そこで、『まんじゆのまへ』にこうした女性の芸能者による関与があったものか、テクスト内部から考察してみたい。

三　物語構造の検討

様々な要素が入り組んだ現存する三本において、細かな相違部分を揺れとみなし、後から付随したものととらえ、三本共通の部分のみを抽出すると、この物語が三つの話から成り立っていることが見てとれる。一つは、物語全体を貫く万寿を中心とした中山観音の利生譚である。安芸・周防・長門を舞台とし、中山観世音の申し子万寿が、家臣かね村による拷問の果て息絶えるものの、観音の利益によって蘇生し、中山の上人に救助され、忠義な乳母とともに比丘尼姿で廻国、越後で母子再会を果たすというものである。また二つめは、万寿の母を中心とする「鎧替へ話」で、かね村の裏切りの後、越後の鎧商人の登場で、鎧と引き替えに越後へと行き着くものである。そして三つめが、母子再会後の「義家話」である。越後で母子再会を果たした万寿は八幡太郎義家に見いだされ、いとこ同士であるという奇縁から仲睦まじく暮らし、かね村らへの返報と鎧商人らへの恩賞の後、末繁昌するといったものである。こうした三つの話がそれぞ

れ有機的に結びつき、『まんじゆのまへ』という物語が成り立っていると考えられる。すなわち、「中山観音利生譚」を中心としながら「義家話」へと展開していくのに、母の「鎧替へ話」が有機的に機能しているといえる。換言すれば、母の「鎧替へ話」があることによって、後の「義家話」へと展開できるのである。

この「中山観音利生譚」と「鎧替へ話」の関係から、母子重視の傾向を見てとることができ、そこに女系の語りの関与を想定することができる。概して観音利生譚における母親は、早くに死んで亡母となって娘を助けるか、最後に現れて母子再会を果たすか、いずれかであるのに対し、ここでは「鎧と替えられる」という重要な役割を与えられ、なおかつ、それが有機的に機能しており、一般の観音利生譚と比べ、娘に対する母の役割の大きさを見てとれる。こうした母系重視は、静御前や祇王などに明らかなように、女系の語りを想起させるものといえる。母から娘へ、女系の芸の継承という女性芸能者の実態[22]を反映したものとみることが可能で、「～寿」という名の持つ女性芸能者、唱導者としての面からだけでなく、この物語に女系の語り手の関与があったことを想定することができる。また一方で、「鎧替へ話」では、その後、鎧についても、再会後の母についても、あまり触れられてはおらず、女と鎧を替えるといった「鎧替へ話」的なものが、まずあって、それを取り入れたことで、そちらの要素が消えていったと推定できる。その点からも、そういう話を物語に取り入れようとするものとして、女系の語り手を想定させるのである。

「鎧替へ話」は、文字通り、鎧の交換に引き渡される母親の話であって、基本的に人買い話とは異なるものである。しかし、その鎧商人を越後の国直江津の者と設定したことによって、受け手に人買いのイメージを生じさせるものであったこともまた確かであろう。実際、奈良絵本においては、清水寺で観音の示現を得た姫が、越後へ向かう船に便船する際の船頭に、人買い的な表現が見いだせ、直江津の持つ文芸世界内でのイメージによるものと考えられる。[23]『まんじ

ゆのまへ』で、鎧と引き替えに母親を得たのは、越後の鎧商人「なをいへ（なをいの二郎）」なる人物であった。この鎧商人の呼称に関しては、お伽草子では「なをいへ」、古浄瑠璃では「なをいの二郎」、奈良絵本では「なをゐの二良しげなが」と諸本間で多少の異同が見られる。だが、お伽草子において、義家から「なをいの庄」を賜る際には、「なをいの次郎」となっており、越後の鎧商人「なをいの二郎」と考えてよいだろう。これは、例えば、能「竹雪」で越後の国の住人「直井の何某」と見られるように、越後の国直江津の地に根ざした人物呼称であったらしく、『村松物語』に至っては「直江の二良」なる心優しき人売りが登場している。[24] こうしたその土地土地に根ざした名称は、例えば『さんせう太夫』にも、「山岡の太夫」と並んで「ゑどの二郎」や「宮崎の三郎」の名が見える。だが、この「直江」を名乗る人物は、お伽草子世界において、他に比べてよく見られるものであった。例えば、『鶴の翁』においても、女主人公「照日の御前」を見初めて拐かそうとする者として「越後の国守直江左衛門」が登場しており、その横暴さから人買い商人のイメージと重なったものと思われる。また『七草ひめ』にも「越後の国直江」なる人物が登場し、越後へ向かう女性の二人旅や、先に挙げた能「竹の雪」の話が物語中に登場するなど、直江津を中心とする物語となっており、それ故主人公にも「直江」の名が付されたものと考えられ、直江津を背景とした類型的人物呼称であったといえる。だが、人買いのイメージを抱かせる名であった一方、特に「直江の二郎」の呼称は、『村松物語』にも見られるように、母を「あたらし殿」として傅く好待遇を見せ、受難の女性の保護者としての面を有するものともとらえられる。そうした女性の保護者が、物語伝承に関わる信仰の徒であったことは、「『明石物語』をはじめ同類の物語には、女主人公が奥州まで旅をしてゆく例が多く、またその女性を奥州の豪族が保護するといった筋立が見られるのは、単に机上の脚色ではなく、遊行宗教家の実際の体験が投影されているものと言えるのではないか」[25]という松本隆信氏の御論考があり、この

「鎧替へ話」の成立背景を考える時に、一つの指針を与えるものといえる。また、何故、他の文芸にも見られる類型的呼称「直江の二郎」を人買いではなく、鎧商人としたのか。この物語における独自性の一つが、鎧と引き替えにされることであったが故の設定ではあろうが、鎧が物語の中心に関わってくるだけの何らかの背景があったのではないかとも考えられる。

そこで、それでは、そもそも越後国の住人を「直江」と名乗らせるようになったのは、いったい、いつ頃からのことであったのか考えてみたい。十二行古活字本『義経記』の巻七「判官北国落ち」には、次のような記述が見られる。

越後の府、直江津花園の観音堂といふところに著き給ふ。この本尊と申すは、八幡殿安倍の貞任を攻め給ひし時、本国の御祈禱の為に直江次郎と申しける有徳の者に仰せつけて、三十領の鎧を賜びて、建立し給ひし源氏重代の御本尊なりければ、その夜はそれにて夜もすがら御祈念ありけり[26]

古態とされる田中本においては、「観音堂は、安倍貞任攻め給ひし時、御祈禱の為に三十領の鎧を賜びて建立し給ふ」という簡略な記事のみで「直江次郎」なる呼称も見られない。しかし、この古活字本の記事について敢えて注目しておきたいのは、八幡太郎創建といわれる観音堂に関わる人物として「直江次郎」が登場しているからである。傍線を引いた部分からは、どうしても『まんじゆのまへ』との何らかの関わりを想起せずにはいられない。『義経記』が後の文芸に与えた影響が多大なものであったことは確かだが、ほんの三、四行程度の、しかもそれを有さない本文もある、この「直江の二郎」に関する記述が、他と同様に、後世の文芸に与えた影響でのみ片づけてしまうのには疑問が残る。岡見正雄氏は、「万寿の前及びむらまつに直江の次郎の名が見え、殊に万寿の前では鎧商人であるとし、八幡太郎の北の方に女主人公万寿前はなったとする。何か八幡太郎に関係した説話が直江津にあったのであろう[27]」と述べられており、大

いに傾聴すべき御考えである。『まんじゅのまへ』の特に「鎧替へ話」に注目するなら、義家と鎧と直江二郎に関する説話が存在し、それを『義経記』、『まんじゅのまへ』の各々で取り入れていったという可能性もあるのではないか。[28]

以上のように、『まんじゅのまへ』における三つの話のうち、母の物語である「鎧替へ話」とその後に展開する「義家話」とが、越後の国直江津という場を背景として繋がりを持つものであった可能性を指摘した。なお検討すべき問題を残すものではあるが、「鎧替へ話」がもとはそれだけで独立したものであって、それが『まんじゅのまへ』の中に取りこまれていった可能性は十分考えられる。それでは、この物語の中心である「中山観音利生譚」と「義家話」とは、どのような背景から結びついていったのか。お伽草子や古浄瑠璃では、もりとしに、姫が十歳になったら源氏を婿にしようと予告めいたことをいわせ、あるいは、父もりとしと義家の父とがいとこであるという奇縁が三本共通してあり、「もりとし＝源氏」から、源氏の娘と義家が結ばれるという装置には、阪口氏の指摘される「八幡あるいは源氏の信仰」と万寿の関わりを、その背景として考えることもできるだろう。しかしながら、例えば、先にも述べたように、奈良絵本で万寿は「せんじゅ」となっており、万寿と「千手（千寿）」が置き換え可能であったと考えた場合、阪口氏の御説を再び検討する必要性が生じてくるだろう。確かに女系の語りの関与の可能性は指摘できるが、それが「八幡・源氏信仰の女性唱導者」といえるかどうか断言できず、それを以て義家登場の理由を片づけてしまうことにも賛成しがたい。しかも、もう一つの根拠である「中山」についても、「せんじゅ」を考えると「満中」との音通を根拠とすることに不満が残る。そもそも、この「中山」[29]が、本当に摂津国の中山寺のことを示したものなのか、改めて考え直す必要があるだろう。

四　「中山」における唱導

摂津国の中山寺については、多田での唱導を背景に成立したと考えられる「満仲」での「中山観音」に関する描写が参考となる。そこでは、いずれのテクストにおいても、摂津国の多田を舞台としていることが明記され、当然のことながら、摂津国、多田の中山寺とわかる表現がなされている。[30] しかし一方、『まんじゆのまへ』[31]における「中山の観世音」に関する記述を見てみると、まず、申し子祈願の場面においては、

もりとしは、御台所を近付て「我はいかなる罪業にて、子といふものゝなき事よ」といよ〳〵嘆き深かりけり。御台、此由聞こし召し「まこと、さほどに思し召さるゝ物ならば、あの中山の観世音は霊験あらたにましませば、申子の御立願あれ」と仰ける。判官げにもと思し召し、（略）御台所は、網代輿に召れつゝ、かね村も御供申て、さゝめきわたつて中山さしてぞ参らるゝ。中山にもなりぬれば、もりとし、御台も、卅三度の礼拝有て、上人に対面有、申子の立願を頼まるゝ。（略）もりとし夫婦は喜び急ぎ、御前を下向有、館をさしてぞ帰らるゝ。

と、周防の判官が申し子祈願に向かうのだが、その際、道行きなども見られず、館から近い位置にある寺のような印象を受ける。また、中山の上人に関する記述においても、

中山の上人は、その夜、あらたなる霊夢を蒙り「黄金が窪の草むらに法華経の八の巻たゝしう有」と御告げ有て、御弟子あまたうち連れて、黄金が窪へぞ出給ひ、こゝやかしこを尋ね給へ共、法華経はなくして容色たぐひなき女房二人有。上人は御覧じて「かゝる人倫遠き草むらに女の有は不思議也」とあやしめ給へば、乳母、此由うけ給はり「いかに上人様、我々は魔縁の物にても候はず。此国の御主、周防の判官もりとしの姫君に万寿の姫とてまし

すが、邪見なるかね村が責め殺し、此草むらに捨てられ給ふ也。（略）上人聞こし召して「さては、もりとしの姫なるかや。後日にこれがかね村にもれ聞え、共に罪科に及ぶ共、ひとまづ姫君を隠さん」とて、御堂より遺戸を一枚取寄せ、姫君を乗せ申て、中山さしてぞ帰りける。（略）上人は、姫君を近付けて「いかに姫君、いつまでもこれにとゞめたくは存すれ共、かね村か方へ近ければ、後日にこれが聞えなば御身の為もあしかるべし」

とあって、周防にいるかね村からごく近い場所に「中山」の寺が想定されているのである。このように、物語の内部世界においては、摂津の中山寺と考えたのでは明らかに違和感を生じさせるものになっている。また「満仲」においては、「中山寺」と称されているのに対し、ここでは「中山」という表現が専らなされており、「中山」の地にある「観世音」という解釈も成り立つといえよう。

以上のように、安芸、周防、長門を舞台としている物語内部の問題から、この「中山」を改めて規定したい。そこで安芸、周防、長門周辺の「中山」という地にある「観世音」を検索してみると、現在の山口県宇部市にある広福寺という寺が注目される。『宇部市史』によれば「真言宗、山号明王山」の寺で、「古くから宇部の人々には中山の観音様として親しまれてきた寺」であるという。[32] 以下、「長州厚狭郡中山村明王山廣福寺縁記」[33]に沿って、この寺にまつわる伝承について確認しておきたい。文武天皇の頃、役行者が当地で延命地蔵を作り、庵を結んで安置したのが起源であると伝え、下って天平十三年（七四一）に地蔵院が建立され、延暦二十三年（八〇四）、弘法大師が入唐の折、不動明王・波切地蔵などの像を書写奉納したとする。さらに、康和三年（一一〇一）、堂舎焼失の後、源義家による再建を経、地蔵堂に聖観音が祀られたと述べる。この観音は、大内氏の祖百済の琳聖太子将来によるもので、三代の孫藤根が地蔵堂に安置して広福寺と号して以来、大内氏の崇敬するところであったが、厚東氏も深く信仰し、特に霜降城を築いた武光の崇

敬は厚く、文和年間（一三五二―五五）までは、厚東氏の守り本尊とされるなど、厚東・大内両氏の信仰の篤かったことを強調している。さらに、建武新政の頃西下した足利尊氏は、当寺に参籠して祈願をこめ、成就のお礼として伝灯料を寄進したことを伝える。尊氏の参籠については、『厚狭郡舟木宰判沖ノ壇村寺社由来』[34]に「三拝ノ裏ニ書付有」として「長寿寺殿征夷大将軍尊氏御筆、永和四年戊午十二月十八日誌之」とあり、書付の内容は明らかでないが、建武のころから四十年ばかり後に尊氏の書を確認していることがわかる。以上、役行者、空海から庇護者としての足利・大内・厚東氏、さらには源義家までを本尊聖観音にまつわらせる伝承があり、地方のそれもあまり有名とはいえない一寺院の由来にしては、かなり大掛かりなものとなっている。こうした由来の傍証となるべき文書記録が伝わらないため、中世の状況は明らかでないが、室町期の秀作である四天王立像、あるいは頭部内側に「長禄二年再興之　住持元」の銘記のある地蔵立像などが伝えられており、中世における寺運の一端を窺わせる。また、毛利家文庫本「厚東氏系図」には、観音堂の柱に「番長武忠」の記名のあったことなどから、広福寺の創建はやはり厚東氏との関連において考えるべきであろう。

それでは、厚東氏とはいったいどんな氏族であったのか、確認しておきたい。厚狭（あさ）郡域は中世から近世初期には私称としての厚東郡に属しており、この厚東郡を本拠として有力武士に成長したのが厚東氏である。厚東氏は系図によっては物部守屋を遠祖と伝えるものもあるが[35]、半ば伝説的であってその確証はない。但し、山陽町吉部寺尾八幡の弘長元年（一二六一）の棟札写に「大檀那物部武村[36]」と見え、他にも物部姓が見られることから、少なくとも鎌倉時代においては、厚東氏が物部姓を称していたことは確認でき、物部氏の一族が平安朝に長門国に下向、同郡に土着して厚東郡司を称した可能性も考えられる。『源平盛衰記』巻第三十六の「一谷城構」には、平家年来の者として「厚東入道武道」と

あり、平安末期の源平の合戦には平氏を助けて一ノ谷の合戦に加わるほどの武士に成長していたことが推測される。また『長門国守護次第』[37]には、壇ノ浦の海戦直前、源氏方に転じた厚東氏の一族大塚氏も、長門守護天野義景の代官に補任されるなど、長門国屈指の有力御家人となっていたことを窺わせる。『梅松論』などによれば、鎌倉末期、厚東武実は後醍醐天皇の建武新政を助けて長門国守護となり、新政瓦解の後は足利尊氏に従って活躍した。武実の没後、武村、次いで義武が守護に補任されるが、当時、周防国にあって強力になった大内氏と対立、次第に圧倒され、ついに延文三年（一三五八）正月、霜降城は陥落、義武は豊前国企救郡に逃れた。翌年、彼は長門国に帰り、四王司山に拠ったが敗れる。『太平記』には、貞治二年（一三六三）、これまで南朝方に属していた大内氏が北朝方に転じたため、厚東義武は南朝方に転じ、九州の南朝方と連携して大内弘世を破るなどの活躍を見せる。だがこの後、厚東氏は宮方の勢力衰退とともに領主としての姿を消していく。こうした厚東一族に関する興味深い史料として「長門國守護及守護代」が挙げられる。そこには「周防國徳池村と云ふ處に厚東氏の子孫ありて古系圖を傳へ藏したる者ありとぞ今は盲目なる由」[38]と記されており、少なくとも江戸期には、厚東氏の子孫で古系図を持って語り伝える者たちがいたことが確認できる。

こうした厚東氏を中心とした広福寺の縁起及びその周辺に見られる史料などから、いくつかの『まんじゆのまへ』との共通要素を見いだせる。まず「中山」の地名が挙げられるわけだが、慶長五年（一六〇〇）の検地帳に「中山」とあることから、少なくとも現存する三本の成立時期よりは上ることができる。また、周防判官もりとしについては、『防長寺社由来』に「厚狭郡中山村明王山本堂本尊観音」とともに、芸防長の大守判官「盛利」、及び「八幡太郎義家」の名を見いだすことができる。[39]但し、これは寛保元年といささか下ったものではある。だが、先に述べた広福寺の縁起には、

厚東郡中山村真言宗明王山殿御上路の時も厚東武實供奉仕けり、誠に武實ハ名将にてありしか其子武村は悪逆人に勝れ寺社を放火し僧侶を追放し、罪なき人を害し誠に不道の大将なり、或時當山江参詣ありて戯の餘りに本尊を誹謗し奉り、剰持扇子を以本尊の御腰を打たゝきしかは霊験不思儀にして忽チ本尊の御腰斜せ給ふ事こそふしきにも恐ろしき御事なり、剰堂塔を放火しけれハ悉焼失けり、本尊ハ火中より飛出させ給ふ、誠に有かたき御事なり、其後追々に僧侶悉退散しけり、古へ源義家公御建立の五重の寶塔ありし処を塔の元と名つけしか、彼寶塔焼亡之後ハ今に其地を乱塔とそ名つけり、其後八院の坊中破壊して只今は名のミ残れり、霜降の城主武村は厚東十五代の守護にて有しか悪逆の報にや短命なり

とあり、この武村の話は、奈良絵本の悪口したために死んだもりとしを思わせ、また後述するこの地方の伝説類のもととなったものと考えられる。さらに、かね村についても、『防長風土注進案』の「厚狭郡風土記　棚井村」の項に、厚東家臣として「包村」の名を見いだすことができる。「包村」の守護していた「引地の城」は、『宇部市史』の「霜降城趾図」によると、その麓に「城ノ浴」「長溝」「切り塞ギ」等の地名が残っていることから、「霜降城の出城、あるいは支城的なもの」と考えられるようで、「包村」が厚東氏の有力武将の一人であったことがわかる。そして何より、こうした縁起、及び周辺史料に散見する「八幡太郎義家」こそ、最大の共通点として挙げられる。言うまでもなく、義家に関する伝承のほとんどは奥州を舞台とするものであり、安芸、周防、長門という他にあまり見られない義家伝承の舞台である点で、有力な共通点として考えることができよう。このように、広福寺の縁起類には、『まんじゆのまへ』の主な構成要素のいくつかが存在しているのだが、肝心の万寿についての記述は、管見の限り、一切見られない。しかし、このことから『まんじゆのまへ』刊行後の史料であるからといって、それを見て作成されたとは言えないと考えるので

ある。つまり、縁起の作成が現存諸本の刊行年を遡ることができなくても、もし板本を見て作成したのなら、不自然に義家を登場させるよりも、万寿に関する何らかの話を導入する方がより納得いくもののように思われ、万寿について書かれていないことが、すなわち『まんじゅのまへ』からの引用ではなく、在地に「中山の観音」「厚東氏の観音に対する悪行ぶり」「包村」「八幡太郎義家」といったものに関わる伝承があって、それを縁起が取り入れたと考えられるのである。

それでは、実際、宇部において何らかの語りが行われていた可能性はあるのかどうか、検討してみたい。『防長風土注進案』をはじめ、防長の地誌類から、少なくとも江戸後期には、宇部における盲僧がかなりの数を占めていたことがわかる。[40] さらにそうした防長の盲僧たちの活動内容についても窺い知ることができる。もっとも『防長風土注進案』の成立を遡る盲僧の様相を表したものは、文献的には確認できないが、例えば、深河村には「此月地神祭り村々当屋へ寄合、盲僧を招き幣を調へ注連を張、終日読経福の種蒔といふことあり、夜半盲僧琵琶を弾しし歌といふものを唄ひ候こと古来よりの習俗にて候」[41]とあり、後述する琵琶法師の語り物と考え併せても、この地方の盲僧の活動を想像させるものといえよう。こうした宇部の盲僧たちが語っていたと考えられるような在地の伝承も、古いものは見つけられていない。ただ、現代の宇部における説話・伝説類には、特に奈良絵本の内容に類似する厚東判官の「宝くらべ」[42]の伝説が散見する。厚東武村が中山観音を罵り傷つけたというもので、この地方のものとしては最も広く伝わった伝説の一つであるといえる。こうした伝説のもととなったのは、おそらく先に挙げた広福寺の縁起内に見られる武村の悪行に関する部分であろうが、そこでの武村に対する憎悪の様は、寺院の縁起としては珍しいものであるように思われる。一方、この厚東氏の系図で、物部氏を祖とするものが伝わることも先に触れたが、仏教受容をめぐり蘇我氏と対立した物部氏を

考えると、その子孫と伝えられる武村の仏像に対する誹謗ぶりが不思議と符合している。

さらに、宇部地方には、成田守氏が指摘なさった「城山くづれ」と呼ばれる琵琶法師の語り物が伝えられている。[43] この地方の「宝くらべ」伝説との共通点も見られ、あるいはもととなった語りとも考えられる。多少の相違はみられるものの、明らかに『まんじゆのまへ』と同材であると認められる。この「城山くづれ」は、『宇部郷土史話』[44]に所収されたものであり、解説によると著者である山田亀之介氏が、明治三十一年に宇部の琵琶法師に初段から四段まで語ってもらい、同四十二年に同じく五段から十二段までを琵琶法師に書いてもらったものだという。「この地方の農家に、毎年一回、一講内が共同して琵琶法師を招き、地神祭ということを催しておった時余興として琵琶を弾かせ、城山くづれなどを語らせたものであった」と記されている。現存する古写本などは確認されておらず、また、後半を書かれた琵琶法師によると、「昔の城山くづれが分からなくなって、その後作られたのが現在のものじゃ」とあることから、明治三、四十年代頃の「城山くづれ」は再興されたものということになる。しかし、成田氏が検討されたように、各章段の語り出しと結句には、「多少形式的にはくずれているものの以前は古浄瑠璃風の形態をもっていた作品」と推定することができる。御国浄瑠璃の多くがそうであったように、口頭で伝授されてきたため、台本の必要がなかったのであろう。語り物的趣向の強い物語ではあるが、何もかも取り入れようとして雑多な印象を抱かせる。ただ、奈良絵本とのみ共通部分が見られるものの、奈良絵本の性格から考えて、それを見て語ったとも考えがたく、この宇部の地にもともとあった伝承をより語り物風に改めていったのが、この「城山くづれ」であったのではなかったかと推測される。

宇部の中山には、厚東氏という一氏族の影響を多分に受けた、八幡あるいは観音と関わる在地の信仰状況が想定され、『まんじゆのまへ』における「中山」は、この地を指したものである可能性が高いことが指摘できる。それはまた、

刊本成立以前の段階における「中山の観世音」に関する語りが宇部にあったことを想像させるものでもあった。特にこうした語りが、防長において盲僧集団によって行われていたらしいことは、先に触れた筑前盲僧による黒髪山の大蛇退治伝承を思わせ、防長盲僧と筑前盲僧とを結ぶ存在としての万寿をも想像させよう。千手との置き換えを含め、観音の申し子である万寿には、盲僧との接点を想起させる。中国及び北九州における万寿伝承[45]が、盲僧によって語られていたという仮説は、例えば、中世期においては物語の生成に確実に女性が関与していたといえる『浄瑠璃物語』も、物語が定着して後は、座頭の独占に帰したものとなっていったように、『まんじゆのまへ』においても、物語としての成長を遂げるにつれ、男性の語り手に委ねられていったとも考えられる。防長盲僧やその語りについては、古い史料も現存していないことからか、あまり研究が進んでいない分野であり[46]、現在のところ、想像の域を出ないものではある。また、そうした宇部の語りを前提とした場合、それがどのようにして、古浄瑠璃化され、またはお伽草子として草紙化されるにいたったのか、今後の課題として考えていかなければならない問題である。

注

（1）『近古小説新纂』（有精堂　昭和五八年十月）

（2）「万寿の物語」（「芸能史研究」九四　昭和六一年七月）

（3）『新修日本小説年表』（春陽堂　大正十五年）には「万寿の姫　延宝元年」と記されているものの、現在のところ未詳。

（4）限定つきの子種というモチーフについては、例えば、説経『しんとく丸』にも見られ、お伽草子『さよひめのさうし』においては、「七歳の年、父の長者がむなしくな」るという子種を授かり、姫十三歳の年に「神や仏だに偽り事をの給ふ」と言って、観音の怒りを買い、長者が亡くなるという展開になっている。

(5) 細川涼一氏「中世の旅をする女性―宗教・芸能・交易―」（『女と男の時空　Ⅲ女と男の乱―中世』藤原書店　平成八年）「二人づれの女性芸能者」（大系日本歴史と芸能『中世遍歴民の世界』平凡社　平成二年十月）参照。

(6) 『奈良絵本絵巻集5一本菊・よろひがへ』（早稲田大学出版部　昭和六三年）解題。

(7) 『日本庶民文化史料集成』第七巻「人形浄瑠璃」（三一書房　昭和五十年）

(8) 若月保治氏「古浄瑠璃『五輪砕』と絵巻『上瑠璃』」（「国語国文」六―三　昭和十一年三月）、森武之助氏『浄瑠璃物語研究　資料と研究』（井上書房　昭和三七年）参照。

(9) 『語り物「舞・説経・古浄瑠璃」の研究』（風間書房　昭和五二年）

(10) 角田一郎氏「道行文展開史論（五）―古浄瑠璃の部（四未完）―」（「帝京大学文学部紀要　国語国文学」一七　昭和六十年十月）参照。なお、実際の上演記録としては、『歌舞伎年表』第一巻（岩波書店　昭和三一年）によれば、延宝三年（一六七五）霜月に、江戸市村座の番付に「鎧替三番続」「かねむらちりやくの酒盛」「なおひかなさけ」「義家祝言のば」と見える。

(11) 『大日本古記録　言経卿記』三・四より引用。同じく天正十九年閏正月一日条にも「西御方へ暮々礼ニ罷向了、…六太記・鎧代物語抔返給了」と見える。

(12) 前掲注9参照。

(13) 徳田和夫氏「唐糸草子の〈唐糸の前〉と〈万寿姫〉」（「国文学　解釈と教材の研究」二七―一三　昭和五七年九月）

(14) 百合若伝承と八幡信仰の密接な関係を示すものに、壱岐の巫女イチジョーが語る「百合若説経」がある。八幡秘蔵の百合の花による名称など、百合若説話は宇佐八幡の唱導文学として行われていたものと考えられる。前田淑氏「百合若説話と八幡信仰」（「文芸と思想」一八昭和三四年十一月）など。

(15) 『太宰管内誌』豊後之六（日本歴史地理学会　明治四二年）、『雉城雑誌』四（『大分県郷土史料集成』三巻　臨川書店昭和十三年）、『豊府国志』巻四（文献出版　昭和六年）などに伝えられる。前田淑氏「日本各地の百合若伝説（上・下）」（「福岡女学院短期大学紀要」五、六　昭和四四、四五年三月）参照。

(16) 市場直次郎氏『豊国筑紫路の伝説』（第一法規出版　昭和四八年）

(17) 『武雄市史』（武雄史編纂委員会　昭和四八年）。『長崎郷土誌』（臨川書店　昭和四八年）にもほぼ同様の話がある。

(18) 「桃太郎の誕生」（『柳田國男全集』第六巻　筑摩書房）

(19) 伊東祐子氏『藤の衣物語絵巻（遊女物語絵巻）影印・翻刻・研究』（笠間書院　平成八年）参照。絵画部分のみにではあるが、「せんしゆ」「めいしゆ」「まんしゆ」「おとしゆ」「ちしゆ」「わうしゆ」の名を持つ「あそび」たちが描かれている。

(20) 石上堅氏『新・石の伝説』（集英社　平成元年）

(21) 徳江元正氏「桔梗姫の唱導」（「國學院雑誌」六二―十一、十二　昭和三六年十一、十二月）

(22) 遊女をはじめとする女性芸能者について、脇田晴子氏は、「集団の長者は女性であり、芸能なども、母から娘へと母系制的な血縁関係で相承されている」と指摘された。「中世における性別役割分担と女性観」（『日本女性史2中世』東京大学出版会　昭和五七年）

(23) 直江津を舞台とした文芸の隆盛については、岩崎武夫氏「説経「さんせう太夫」と境界性―直井の浦、人売り譚考―」（「文学」四五―八　昭和五二年八月）、中村格氏「中世における海運の発達と能―北陸の港湾を舞台とする作品を中心に―」（『国語国文学論叢』続群書類従完成会　昭和六三年）などがある。

(24) 上野図書館本「なをいの四郎」、寛永十四年浄瑠璃正本「なをゐの次郎」と諸本間で表記が異なる。伝承文学資料集第二輯『室町期物語』（一）の神谷吉行氏の解説によれば、「四郎」は何らかの理由で「二郎」を書き改めたものと推測されている。

(25) 「本地物周辺の室町期物語―明石物語ほか武家物諸篇について―」（「国語と国文学」昭和五六年六月）

(26) 日本古典文学大系『義経記』（岩波書店）より引用。芳野本『義経記』では古活字と同様のものであるが、赤木文庫本『義経物語』では田中本と同じく八幡殿や直江次郎の記述を欠くものとなっている。その他、地誌類においても、義家及び直江次郎に関する記述は全て『義経記』に依ったもので、この説話がいつ頃からどんな形であったものかを示すものは他に見いだせていない。

(27) 日本古典文学大系『義経記』（岩波書店）頭注。

(28) 東国の水陸交通の要衝である直江津において、女性の苦難を語る物語は少なくない。例えば、能「婆相天」も人買い説話を語るものだが、その悲劇の中心は、東国西国の船に売り分けられた姉弟いずれかの選択を強いられた母親が直江の

浦に入水するところにあり、直江津という境界での女性の受難、とりわけ母子の絆を語ったものととらえられる。直江津においては、安寿に関する伝承が著名であるが、越後や佐渡といった在地においては、説経正本に比べ、より女性の語り手の関与が濃厚なものとなっていることが指摘され、越後国直江津の周辺で、女性の語り手によって受難の女性の物語が語られていたことを推測させる。

(29) 「中山」の地名は、黒田日出男氏「中山―中世の交通と境界地名―」(『境界の中世　象徴の中世』東京大学出版会　昭和六一年)などに指摘されているように境界性を帯びた地名といえる。また『明石物語』における北の方の「佐夜の中山」の山中出産や夜啼き石伝説など、女性の苦難を語る伝承の存在から聖性を帯びた地名とも考えられる。さらに、「中山」のような有名な地における観音と女性を語る伝承として、豊後国の内山観音にまつわる伝承なども挙げられるだろう。白方勝氏『伝承の文学』(風間書房　平成九年)参照。

(30) 「満仲」には、能「仲光」、京大本「多田満仲」(岡見正雄氏「説教と説話　多田満仲・鹿野苑物語・有信卿女事」『仏教芸術』五四)、幸若舞曲「満仲」、お伽草子「多田満中」(『未刊御伽草子集と研究』三)などが挙げられるが、いずれも摂津国の「中山寺」と表記される。

(31) 『室町時代物語大成』より引用。但し、私に漢字を当て、濁点・送り仮名を補う等の処置を施した。

(32) 『宇部市史　通史編』上巻(宇部市史編纂委員会　昭和四一年三月)

(33) 『防長風土注進案』第十五巻「舟木宰判」(マツノ書店　昭和五八年)所収。但し、広福寺縁起の正確な成立年次は明らかではなく、現在のところ、ここで用いた『防長風土注進案』の成立時である天保年間までしか遡れない。

(34) 『宇部市史　史料編』上巻(宇部市史編纂委員会　昭和四一年十月)

(35) 先に挙げた毛利家文庫蔵「厚東氏系図」の他、長門浄名寺所蔵「厚東家譜」、長門市所蔵「厚東氏系図古写」などがある。

(36) 前掲注32より引用。

(37) 『続群書類従』第四輯上より引用。

(38) 『長門長府史料』(長府市編纂会　昭和四九年)より引用。

(39) 『防長寺社由来』第四巻(山口県文書館　昭和五七年)より引用。

(40) 高橋正氏「防長両国における地神祭について」(『藩領の歴史地理―萩藩―』大明堂　昭和四三年)、二宮正道氏「防長盲僧小考」(「山口県地方史研究」二二　昭和四四年十一月)

(41) 『防長風土注進案』第十八巻「前大津宰判」。他にも、三隅村「地神祭り此頃地神祭とて往古より村々にて会合、地神経盲僧招き終日琵琶を弾し読経仕らせ、終りに五穀成就の種蒔と号し盲僧并に当屋の主を胴上ケの祝ひ候」(前大津宰判)などと伝えられる。

(42) 『日本伝説大系』第十巻(みずうみ書房)、松岡利夫氏『山口の伝説』(角川書店)など。お伽草子、古浄瑠璃には「宝くらべ」の表記は見られないものの、明らかにその内容は「宝くらべ」を思わせるものであり、奈良絵本においては「宝くらべ」と明記されていることから考え、原態においては、よりはっきりとした形で「宝くらべ」が語られていただろうことが推察される。

(43) 「防長の盲僧」(『盲僧の伝承』三弥井書店　昭和六十年)

(44) 山田亀之介氏『宇部郷土史話』(宇部郷土文化会　昭和三十年)

(45) 古浄瑠璃『よろひがえ』の中に「物のあはれをとゞめじは、筑紫周防の国におはします万寿の姫にて、もの、あはれをとゞめたり」とあり、「筑紫周防」の表現が注目される。後世になって、そうした土地にくらい者によるものとも考えられるが、百合若伝承や為朝伝承など九州北部に見られる万寿の活躍を考えると、むしろ「筑紫周防」一体の「万寿の姫」というような解釈も想定されよう。

(46) 伊藤芳枝氏「周防長門の盲僧と薬師信仰」(歴史民俗学論集2『盲僧』名著出版　平成五年)

〔付記〕
本稿は、平成十一年七月十日の伝承文学研究会第二八五回東京例会での口頭発表をもとにしたものである。席上、御教示を賜った徳田和夫先生をはじめ、諸先生方に心より御礼申しあげたい。